藤女子大学
図書館だより
Fuji Women's University Library

新入生歓迎号

No.102
2023.4

CONTENTS

1. 図書館で目覚めた本の世界
…… 図書館長 高橋 博
4. 教員著作紹介
5. 第5回 学生選書ツアー開催
6. 展示紹介 学生による企画展示
7. LiSt活動報告 第8回
7. 図書館からのお知らせ
8. 図書館資料Navi 第17回
思想を伝えるかたち
～『新約聖書』の写本と羊皮紙～
… 日本語・日本文学科 山吉 裕子

図書館で目覚めた本の世界

図書館長 高橋 博

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
We are so excited to have you all on board!
そして在学生の皆さん、おかえりなさい。
It's great to have you all back on campus!

今回は私自身が皆さんくらいの年齢だった頃の図書館との関わり、そしてこれまでの読書体験の一部を共有することで、皆さんがそれぞれ自分自身の知的営みとしての「読むこと（reading）」を振り返り、大学での図書の利用について考える機会になればと願い、寄稿させてもらいました。

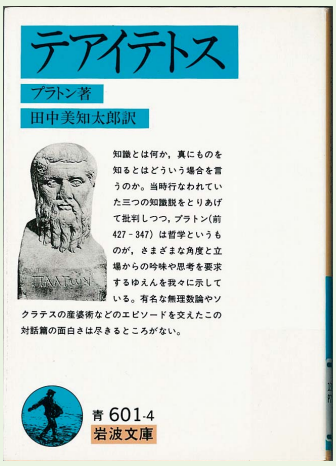
図書館、そして読書との出会い

振り返ってみると、自分の図書館との本当の出会いは随分と遅く、10代も終わりに差し掛かりつつある頃でした。そのころ浪人生だった私は、当時全盛期だった予備校にはお金が無くて行けず、いわゆる宅浪（自宅で浪人生活をすること）をしていました。浪人生だったということからも分かる通り、高校時代はどちらかというと（いや、おそらく間違いなく）劣等生で、バンド活動などの方に力を入れていたため成績も振るわず、図書館という場所も縁遠いところでした。今から考えると読書経験もかなり浅いものだったと思います。そんな浪人生活を始めて間もない頃、「家の中で勉強しているだけでは息が詰まる、もっと外の空気や時代の流れを感じたい」という思いで、折を見つけては自宅のあったもみじ台から自転車で街まで繰り出すようになりました。とはいえ、貧乏浪人生ですので、おしゃれなカフェなどに行くわけにもいかず、迷った末にたどり着いたのが（移転前の）札幌市中央図書館でした[1]。そう、最初は「無料の休

[1] 当時の中央図書館は北２条西１２丁目にありました。

次ページへ続く↗

憩所」くらいの意識で立ち寄ったのがたまたま（そして必然的に）図書館だった訳です。せっかく1時間もかけて来たのだからと、図書館内をあちこち歩くうちに、とあるセクションに目が留まりました。そこには古い岩波文庫がずらりと並んでいて、なぜか『テアイテトス』と背表紙に書かれた一冊に惹かれ、おもむろに手に取りました。著者のプラトンの名前はもちろん聞いたことはありましたが、実際に著書はそれまで一つも読んだことがなく、何故それを選んだのかは今でも分からないのですが、何かに導かれるように読み始めました。それからいくつページをめくったかは覚えていません。ただ、その場に立ったまま、まるで古代アテネの街角にワープして、ソクラテスとテアイテトスらとの対話を実際に見ているような感覚になり、自分が漠然と考えていた「知」や「真実」といった抽象的な概念が言語化され、それらを巡って白熱した問答が展開されていくその議論の「場」に自分がいて、今まさにその空気を体験しているような、そんな不思議な感動が体の中を流れていくのを感じていました。文字通り何者でもなかった自分が、その時どのようにして身分を証明し貸出登録ができたのかは全く記憶にないのですが、とにかくその文庫本と他の数冊の本を借り、急いで家に帰ったのを覚えています。それから毎週の図書館通いが始まりました。『メノン』、『プロタゴラス』、『ソクラテスの弁明』といった他のプラトン本はもちろんのこと、ジャンルを問わず、新書からハードカバーまでとにかく直感にまかせて面白そうだと思う本を次々と借りては読んでいきました。何も知らない人が新たに知識を獲得するさまを「乾いた砂漠が水を吸い込むように」などと表現することがありますが、それまで「無知の知」すら知らなかったところから、読書を通じて様々な作家や思想家と「対話」する楽しさに目覚めるところまでいった当時の自分は、まさにそんな例えがぴったりな状態でした。英語では、そういった「目から鱗」体験のことをepiphany（突然の洞察、ひらめき）と言ったりしますが、あの日の図書館体験はまさに epiphany momentであり、本当の意味での「知の扉」を開けた瞬間だったのかもしれません。後にも先にも、あれほど多様なテーマの本を縦横無尽に読み漁り、思索する楽しさを自然体で感じた時間はありませんでした。（もちろん受験勉強も同時にしていましたが、どちらかというと「息抜き」に近い感じで読書を楽しんでいた記憶があります。また、古い文庫本を多く読んだ副産物として、旧字体をかなり読めるようになりました。今ではあまり役に立たない知識かもしれませんが。）



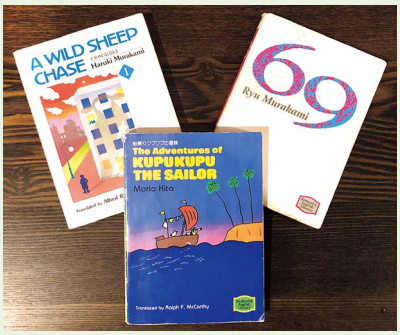
『テアイテトス』
プラトン著、田中美知太郎訳
岩波書店
請求記号：131.3/P71（本館所蔵）

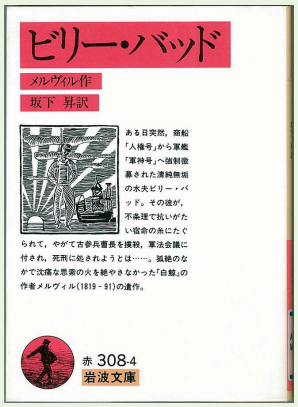
英語と古本、そして英語文庫・洋書との出会い

そんな貧しいながらもある意味でとても「豊かな」浪人時代を経て、翌春には何とか北大の門をくぐり無事大学生になることができました。北大には日本でも有数の蔵書数を誇る大学図書館があり、まさに水を得た魚のように図書館を隅から隅まで活用し尽くす、はずだったのですが、実際には（少なくとも学部生の間は）そうはなりませんでした。というのも、実は浪人時代に英語とのもう一つの「出会い」を経験し、入学時までに英語への興味が大きく膨らんでいてそちらに割く時間が大幅に増えていたということと、大学生になってアルバイトを始めるようになり、自分で本を買うことが多くなっていったという背景がありました。その頃は英語関連の書籍以外にも、プラトンで哲学への知的好奇心を掻き立てられていたこともあって、当時ちょっとしたブームになっていた現代思想の新刊本を下線を引いたり余白に書き込んだりしながら読むことが増えたので、そういう「ワガママな」使い方のできない図書館の書籍からは少し距離を置くようになった部分もあった気がします。特に英語に関しては、面白いと感じた内容だけではなく、知らない単語・フレーズや「これは使える」と思った表現に下線を引くのが癖になっていて、しばらく経ってからパラパラと見直すといろいろな発見があって、「本を所有する」という価値に気づいたという点も大きかったのだろうと思います。

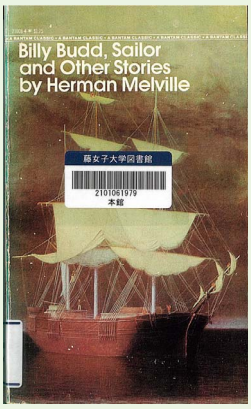
そうはいっても、やはり貧乏学生であることには変わりありませんので、必然的に古本屋に足が向くようになりました。幸い、北大の界隈には趣の異なる様々な古書店が並んでいましたので、その中で思わぬ掘り出し物を見つけることもあり、古本屋さんは自分にとってはまさにserendipity（「思わぬものを偶然に発見する能力・幸運」のこと）の宝庫のような場所でした。今はネット書店でどんな書籍も簡単に検索して購入できる時代になりましたが、探していた本とは別の関連する本がもっと面白かった、なんてこともよくありますので、古書店に限らず書店で実際に本を探す醍醐味は今も変わらないのではと信じています。（AIによるサジェスチョンも便利で役に立つ情報ですが、「偶然性」についてはまだまだではないでしょうか。）

ただ、古本屋には洋書や英語関連の書籍はそれほど多くはなかったということと、自分の当時のレベルで読める洋書が少なかったことがネックでした。そんなある日、確か大学2年生の頃だったかと思いますが、どこかの書店で講談社インターナショナルの「英語文庫」というシリーズを見つけ、日本語の文庫本と価格もそれほど変わらないことが分かり、小躍りしたのを覚えています。（実際には飛び上がったりはしませんでしたが。）この英語文庫が当時の自分にとって画期的だったのは、例えばサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』のような名作だけではなく、日本の現代作家による作品の英訳も多く収録していることでした。洋書（原書）をいきなり読むのはハードルが高いけれども、日本の作家の作品であれば、舞台が日本であることも多いし、きっと読みやすいのではないかという予感があった訳です。その予感は見事的中し、この英語文庫による諸タイトルは自分の英語力を飛躍的に向上させる大きな原動力の一つとなりました。当時既に人気作家となっていた村上春樹の『羊をめぐる冒険（*A Wild Sheep Chase*）』や『ノルウェイの森（*Norwegian Wood*）』はもちろんのこと、北杜夫のユーモラスな『船乗りクプクプの冒険（*The Adventures of Kupukupu the Sailor*）』などもあり、夢中になって読んだ記憶があります。中でも、村上龍の『69 sixty nine』は高校生の時にテレビで毎日のようにベストセラーランキングのトップとして紹介されていた本だったこともあり、最初は興味本位で読み始めたのですが、著者の高校時代の馬鹿らしいけれども時には鋭く時には考えさせる考察は、その表現の自由度の高さとも相まって、引き込まれるように読みました[2]。地下鉄の中で読んでいてつい声を出して笑ってしまい、恥ずかしい思いをしたのは良い思い出です。その時には、自分が「英語で」小説を読んでいるという感覚は全くなく、ただ物語を心から楽しんでいる状態だったように思います[3]。このような経験を経て、大学3年の時には「1日洋書100ページ」というチャレンジを3か月くらい続けたり[4]、Edgar Allan PoeやHerman Melvilleといった近代作家、さらにJohn Updike、Raymond Carver、Paul Austerといったより最近の作家の作品も原書で読むようになり、少しずつ進化（深化）していきました。とりわけ、何故か Melvilleには強く惹かれるものがあり、その独特の文体には今でも魅了されます。『*Billy Budd*』などのお気に入りの作品は（当時はカセットでしたが）オーディオブックでも何度聞いたか分からないほどです。この頃の読書体験は、言語教育・応用言語学の専門分野で大学院に進学してからも大いに役立ちましたし、後に英文記者として英語でニュースを書くようになっても、その後アメリカの大学院に留学した際にも、自分の知的基盤の一部になっていることを強く実感することが多くありました。まさに自分にとっての一生消えることのない「財産」だと思っています[5]。





『ビリー・バッド』
メルヴィル作、坂下昇訳
岩波書店
請求記号：A933.4/Me37（本館所蔵）



『Billy Budd, sailor and other stories』
Herman Melville, Bantam
請求記号：A933.4/Me37（本館所蔵）

最後に

今回この原稿を書きながら、当時読んだ本をまた久しぶりに読み返してみたくなりました。皆さんも、何十年か後に振り返った時にまた読みたくなるような、自分の一部を形作ってくれる大切な本に、大学時代に出会ってもらえたならとても嬉しく思います。そして、そのいくつかが本学図書館で手に取った本であるならば、それ以上の喜びはありません。

[2]　現代のジェンダー論的視点からは問題があると思われる表現も含まれているように思いますが、「表現の自由さ」を英語で感じられる英訳作品として、（そうした批判的な観点を忘れなければ）一読に値する小説だと個人的には思っています。

[3]　おかしな話ですが、英語文庫で読んだ日本人作家による作品の多くは、オリジナルの日本語で読む機会がないまま今日に至っています。

[4]　皆さんも、もし同じようなチャレンジをしたいのであれば、本学の図書館HPから利用可能な電子書籍サービスである「Maruzen eBook Library」の利用を強くおすすめします。名作からオリジナルストーリー、さらにノンフィクションまで幅広いジャンルの合計370タイトル以上の英語書籍を、スマホやパソコンで読むことができます。英語習熟度レベル別になっているので、レベル表記を見て自分の実力に合った本を選ぶことも簡単です。学内でアカウント登録をしておけば、学外でも自由に読むことができます。詳しくは図書館スタッフに気軽に問い合わせてください。

[5]　学部卒業後の英語との関わりについては、ここではスペースの関係上入れることができませんでしたので、また別の機会に譲りたいと思います。興味のある人は遠慮なく研究室に遊びにきて聞いてください。

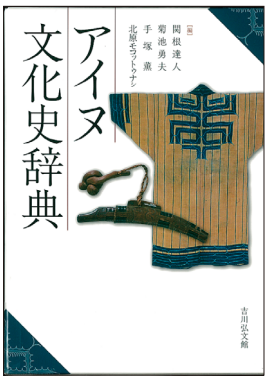
教員著作紹介

先生方に自著紹介をしていただきました。それぞれ所蔵館の教員著作コーナーに本がありますのでぜひご利用ください。

『アイヌ文化史辞典』
関根達人［ほか］編集

吉川弘文館発行　2022年7月1日　所蔵館：本館

文化総合学科　**松本あづさ**



2019年にアイヌ民族を「先住民族」と明記する法律（アイヌ民族支援法）が成立し、2020年には国立アイヌ民族博物館（ウポポイ）が開館しました。皆さんが大学生活を送る時期に重なるように、アイヌ民族政策が進展するなか、2022年にこの『アイヌ文化史辞典』が刊行されました。

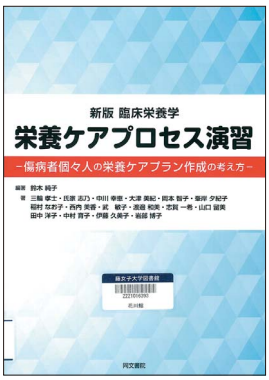
本書は、アイヌ文化に特化した初めての辞典であり、アイヌ文化に関わる約1,000もの項目を収録するという特徴をもっています。現代におけるアイヌ民族に関する問題を考えるうえでも、本書は有用だと思います。

ちなみに、本書の推薦文は『ゴールデンカムイ』著者の野田サトルさんも書かれています。漫画やアニメからアイヌ文化に興味を持ったという方にもぜひ手にとってほしいです。

『新版臨床栄養学　栄養ケアプロセス演習
―傷病者個々人の栄養ケアプラン作成の考え方―』
鈴木純子編著

同文書院発行　2022年4月21日　所蔵館：花川館

食物栄養学科　**田中洋子**

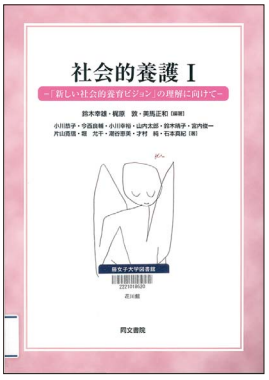


臨床栄養学を学ぶ目的は、傷病者の身体状況・生活状況の把握と、栄養状態の評価に基づいた栄養管理計画を作成すること、そしてこれらを関連専門職との連携の下に実施することができるようになることです。そのためには、栄養管理の手順をなぞり、規則的にあてはめて言語化することで、自己評価と指導者からの評価を得ることが可能となり学びを深めることが出来ます。本書は、症例の栄養管理計画を立てる際に、似た症例の計画を丸写しするだけでなく、なぜそのように考えたのかという思考プロセスを重視することで問題の見落としを防ぎ、対象者のQOL向上に役立つ栄養管理計画を作成する技能を身につけることができるようになっております。

『社会的養護Ⅰ
「新しい社会的養育ビジョン」の理解に向けて』
鈴木幸雄、梶原敦、美馬正和編著

同文書院発行　2022年3月30日　所蔵館：花川館

子ども教育学科　**小川恭子**



平成28年に児童福祉法が改正され、「子どもは大人と同じく権利をもつ主体であること」が明確化されました。新しい社会的養育ビジョンとは、この考えを実現するための今後の社会的養育のあり方を示しており、障がいのある子どもや医療的ケアを必要とする子ども等の支援の充実や、実親による養育が困難な場合には、里親や特別養子縁組といった「新しい家族のかたち」での養育の推進などが盛り込まれています。

私たちはともすると、みんな一緒であることに安心感をもち、「違い」を排除しがちです。でも、生き方や生活環境は皆それぞれです。子どもたちの笑顔を護るために、私たちには何ができるでしょうか。この本を通して一緒に考えてみませんか?

『問いからはじめる教育学（改訂版）』
勝野正章、庄井良信著

有斐閣発行　2022年12年20日　所蔵館：花川館

子ども教育学科　**庄井良信**

教育の原義は、子どもの尊厳ある「いのち」をケアし、そこに寄り添い、社会への参加を支援することです。教育には、子どもという存在そのものを理解し、そのウェルビーイングを探求する姿勢が求められます。教育という対人援助の現場は、よい教育とは何か、教育をよりよくするために何が必要かという「問い」の連続です。近年、文科省の学習指導要領が改訂され、生徒指導提要も改訂されました。現場では、個別最適化、GIGAスクール、子どもの貧困、主権者教育、保幼小の連携と接続など、教育をめぐる実践課題が山積しています。本書は、これらの課題を「問い」として浮き彫りにし、近未来の教育の在り方を根本から問い直すものです。なお、庄井は、第1、3、4、9、10、11、13章を執筆しています。

第5回　学生選書ツアー開催

2022年11月11日に両学部合わせて12名の学生が参加し、三省堂書店札幌店で選書ツアーを実施しました。2021年度は学生スタッフLiStのみでオンライン選書を実施しましたが、学生が直接書店で選書を行うのは2019年以来となります。久し振りの実施ということもあり、参加者は楽しんで本を選んでくれていました。

運営補助スタッフとして参加したLiStと参加学生2名に感想を書いていただきました。

選書した本は、所蔵館で展示しました。（＊参加当時の学年を記載しています。）

2度目の選書ツアー　　LiSt　星

書店での選書ツアーは、コロナの影響で中断していたため、3年ぶりの開催となりました。前回、2019年度の開催時には、私は参加者として選書を体験しました。書店で本を手に取りながら、自分の好きなように選んだ時間はあっというまでした。また、その際にお手伝いをしていた図書館学生スタッフ・LiSt（リスト）の姿を見て、憧れを抱いたことも覚えています。そして今回、2022年度の選書ツアーには、私はLiStとして、選書の様子を記録する係を担いました。参加学生は、事前に本をリストアップしている方、書棚を見ながらその場で選んでいる方など、思い思いの方法で選書を楽しんでいました。時間をかけて店内を歩き回り、吟味している様子を見て、うれしく思いました。また、参加学生が選書を終えた後には、私自身も選書をさせていただきました。3年ぶりに体験した選書はとても楽しく、実際に本を手に取りながら選べる選書ツアーは、魅力的なイベントだと再認識しました。

文学部　英語文化学科1年　Tさん

今回選書ツアーに参加してみてとても楽しかったなと言うのが率直な感想です。今まで自分で好きな本を買うことがあっても選書するということが無かったので少し緊張もしましたがワクワクもしました。私が選んだ本は「教場」シリーズ、経済学の参考書、手話の入門書です。「教場」シリーズはスペシャルドラマとして放送されたものの原作です。経済学の参考書は表紙がとても可愛らしく、中身も読みやすい参考書で、手話の入門書はDVDが付いているため、写真だけでは分かりづらい手話も分かりやすく覚えられる本です。どれも読みやすい本を選んだので、ぜひ読んでみていただきたいです。

人間生活学部　食物栄養学科2年　Wさん

今回、自分の好きな本を紹介するためと他の本好きの人と交流するために選書ツアーに参加しました。

私は普段、ほぼ推理小説やホラー小説しか読まないため、違う種類の本も読んでみたいと考えていましたが、違う種類の本の情報についてほとんど何も知りませんでした。選書ツアーでは他の参加者と最近話題となっている本やおすすめの本の話などをして交流したり、選ばれた本を見たりして、楽しかっただけではなく、読んでみたいと思う本をみつけることができました。機会がありましたらまた参加したいと考えています。

展示紹介 学生による企画展示

図書館花川館では、2022年度も館内で学生さんによる企画展示を行っていました。
今回は展示してくれた3グループの代表の学生さんに展示について紹介をしてもらいました。
（＊展示当時の学年を記載しています。）
引き続き、個人やゼミなどで企画展示をしてくれる学生さんを募集しています。興味のある方は図書館カウンターにお問い合わせください。

人間生活学科4年　Yさん（被服学ゼミメンバー：Kさん、Kさん、Sさん）

今回私たちは2022年9月30日～11月25日の約2か月間、【羊毛フェルトで作る絵本の世界】というテーマで、8つの絵本作品を羊毛フェルトで制作し、絵本と共に展示させていただきました。

この制作はゼミメンバー4人で卒業制作として行いました。絵本は誰しもが幼少期に触れ、思い出に残っているのではないでしょうか。私たち自身も久しぶりに絵本に触れ、懐かしい気持ちになりました。絵本に出てくるキャラクターや小物は色使いが鮮やかで、羊毛フェルトで表現するにはぴったりだと感じました。8作品それぞれの絵本の世界観を忠実に再現できるように、羊毛の色選びや細部にもこだわって制作しました！

この展示を通して少しでも懐かしい気持ちになっていただき、もう一度絵本を読むきっかけになったら嬉しいなと思います。

人間生活学科3年　Oさん

私が所属する被服学ゼミでは12月より「赤毛のアン」をテーマに図書館展示をしました。展示にあたりまずはゼミの皆でくまのぬいぐるみと、作中に登場するパフスリーブのワンピースをくま用に制作し、本と併せて展示しました。生地も各自が好きな柄を選び可愛らしいぬいぐるみが出来上がったと思っています。

展示する図書の個人のテーマには【赤毛のアンの暮らし】を選びました。私たちは非常に便利なものに囲まれて日々生活していますが、アンの時代はどのように暮らしていたのか興味が湧き、今回『赤毛のアン AtoZ モンゴメリが描いたアンの暮らしと自然』を紹介させていただきます。ゼミで赤毛のアンの映像資料を観た時に現代ではなかなか見ない大きな調理器具が登場し、調べてみると、当時はオーブンの下に暖炉が取り付けられており、部屋全体を暖めていた事がわかりました。アン・シリーズに登場する人物や物、物語の場面や舞台、アンにまつわるキーワードのすべてを綴った本となっており、辞書をひくように読むことが出来ます。今回の展示を通して、皆さまにも赤毛のアンの世界に関して興味を持っていただけたら嬉しく思います。

食物栄養学科2年　Kさん

私は「図書館で展示をしてみませんか」という内容のポスターを目にし、中学生の頃好きだったポップ制作をもう一度始めようと思いました。紹介のポップは漫画をモチーフにすることが多く、自分の好きな漫画の内容を組み合わせて展示しているため制作時は時間に焦りながらも楽しく、展示されている時も漫画と展示物の内容を広められるためやりがいがあると感じています。

私がおすすめしたい本は「果実酒・果実酢・ジャム・シロップ：くだもののおいしい作りおき」です。この本では様々な果物のジャムやコンポート、果実酒の作り方を書いています。どこを開いても小粋な写真がページのセンターを飾っており、写真から自分もこんな綺麗なものを作れるのかと自信をもらえます。興味を持った人は是非読んでみてください。

LiSt 活動報告　第８回

「利用者と本を繋ぐ架け橋に」

2022年度はコロナの影響を受けながらも対面授業が本格化し、LiStの活動も活発だった年でした。

特に印象に残っているのは藤陽祭での「ブックギフト」の活動です。このイベントは、LiSt が書いた紹介文をヒントに、タイトルの明かされていない本の中から気になったものを来館者に持ち帰っていただくというものでした。このイベントの日、図書館に約250名の来館者があり、接する機会の少なくなっていた地域の方との交流に図書館も一段と活気づきました。

その他にも、LiStが発行する新たな図書館広報紙として「LiSt Times」をスタートさせました。また2022年度は、２種類の漢字一文字からイメージを膨らませ、6つの本棚スペースを各LiStが担当し、本棚の空間ごとデザインした常設展示「ブックマンション」が始まった年でもありました。

利用者の方と本を繋ぐ架け橋になれるよう、LiStの活動にこれからも取り組んでいきたいと考えています。（北16条LiSt　兵庫）

「誰もが利用しやすい図書館へ」

2022年度はほぼ全ての授業が対面で実施され、LiStの活動もより幅広いものとなりました。

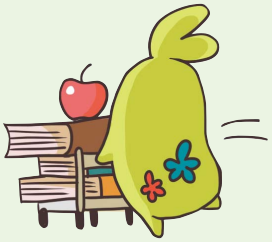
まず新たな取り組みとして、花川館LiStによる広報紙「花川LiSt通信」の発行を開始しました。LiSt通信では、これまで図書館を利用する機会が少なかった学生が図書館へ足を運ぶきっかけとなるよう、基本的な利用方法を中心に掲載しています。他にも、新たな配置図の作成や書架見出しの変更など、図書館を利用しやすくするための取り組みを実施しました。

また、タイトルや内容がわからない本を、LiStが作成したPOPを見ながら選んで借りる企画「本縁結び」を実施しました。この企画では開始してすぐに用意した本がすべて貸出され、図書館の盛り上がりを実感することができました。

新入生オリエンテーションは、昨年度までは当日説明のみ行っていましたが、今年度からは内容の検討から参加しています。これからも様々な取り組みを通して図書館をよりたくさんの人に快適に利用していただけるよう努めます。（花川LiSt　原田）

図書館からのお知らせ

本館について



常設展示「ブックマンション」の棚は、元々あった書架に黒板や仕切りをつけ、職員がリメイクしたものです。ブックマンションに展示している本をゆっくり読みたい時など、近くのソファもぜひご利用ください。

花川館について

【換気設備工事完了】

2022年８月30日から９月10日の間、花川館２階の換気設備工事を行いました。

【2022年度スタートの取り組み】

〇図書館入口近くにホワイトボードを設置

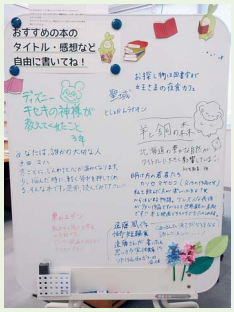
「読んで面白かった」「他の人にも読んでほしい！」と思うオススメ本の紹介を随時募集しています。

本のタイトルと感想の記入お待ちしています☆

〇図書館新着本ニュース発行　＊月に２回程度発行

新たに利用できるようになった本を一部紹介しています。図書館に所蔵している本の紹介なので、気になった本は借りることができます！

図書館では、毎週月曜日に本が追加になります。両館ともカウンター前に新着書架がありますのでぜひチェックしてください。



図/書/館/資/料 Navi（ナビ） 第17回

思想を伝えるかたち
～『新約聖書』の写本と羊皮紙～

日本語・日本文学科　山吉　裕子

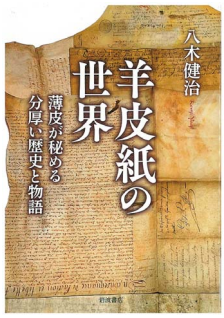
『聖書』は世界のベストセラーであり、様々な言語に翻訳されています。日本語でも、たとえば2018年に出版された聖書協会共同訳や、1987年に出版され現在でも広く用いられている新共同訳、1978年に新約聖書全巻が、2002年に旧約聖書全巻が刊行されたフランシスコ会訳、また個人による翻訳など、様々な種類があります。ところで、「翻訳」ということは、原文はどこにあるのでしょうか。

『新約聖書』に絞ってお話ししますと、諸文書の著者たちが書いた当時の原稿が残されているわけではありません。しかしそれらはパピルス紙ないし羊皮紙に筆写する形で複製が作られ、伝播・継承されていきました。現在知られている『新約聖書』の写本は2世紀から15世紀までのもので、その数は5,500以上にのぼります。最も古いものは、マンチェスターにあるジョン・ライランズ図書館が所蔵しているP[52]というパピルス写本で、125年頃にさかのぼると考えられています。現存しているのは残念ながら『ヨハネ福音書』18章31-33節、37-38節の一部のみです。パピルス紙に書かれた写本は、強度の問題からこのような断片しか残っていないものがほとんどです。最も大きいP[45]というパピルス写本（ダブリン/チェスター・ビーティー図書館所蔵、3世紀）からも『ルカ福音書』10章6節-11章46節（うち欠損あり）のおよそ2章分が読み取れるに過ぎません。わたしたちがまとまった聖書テクストを知ることができるのは、実はパピルス紙と比較すると耐久性に優れていた羊皮紙に書かれた写本のおかげなのです。現存する最古の『新約聖書』の羊皮紙写本は4世紀にさかのぼるバチカン写本やシナイ写本で、とりわけ後者はギリシア語『新約聖書』全体を含む唯一の完全な大文字写本です。研究者たちはこのような写本に加え、古代訳や教父の引用といったものを考慮しつつ、最も原典に近い本文を確定する「本文批評」という作業を行い、それを基に各国語への翻訳をしています。

パピルス紙

羊皮紙（山羊皮）

このように見てみますと、『新約聖書』が文書として伝えられる上で羊皮紙が果たした役割の大きさが分かります。「何が」書かれているのか、ということだけでなく、「何に」書かれているのか、ということもぜひ知っていただければと思います。たとえば八木健治『羊皮紙の世界』岩波書店、2022年は、多くの写真と共に羊皮紙の製法や用法を解説しており、入門にはうってつけです。ちなみに、北海道士別市ではそれまで焼却処分されていたひつじ皮から羊皮紙の生産を始め、「ひつじの町」の新しい商品となっているそうです。



『羊皮紙の世界：薄皮が秘める分厚い歴史と物語』
請求記号：584/Y15（本館所蔵）

＊パピルス紙、羊皮紙（山羊皮）は山吉先生がお持ちのものをお借りして撮影したものです。

●編集後記●

巻頭言は「図書館で目覚めた本の世界」と題し、高橋博館長からご寄稿いただきました。高橋先生が浪人生時代にふと立ち寄った図書館で手に取った一冊の文庫本。それを読んだ感動から様々なジャンルの本を借りて読むようになったこと、大学生時代は英訳された日本の作家の作品を、英語力が上がってからは洋書（原書）も読むようになったことなど、先生の読書体験が綴られています。図書館資料Naviは「思想を伝えるかたち～『新約聖書』の写本と羊皮紙～」と題して、山吉先生にご寄稿いただきました。「羊皮紙」ということばを初めて目にした方は、文中でご紹介いただいた『羊皮紙の世界』をぜひ読んでみてください。みなさんにとっても忘れられない大切な本との出会いがありますよう、図書館だよりもその一助になれれば幸いです。（O）

図書館キャラクター「きしんさん」

スマートフォンではアプリを利用できます

藤女子大学　図書館だより　第102号 2023.3
発行者　藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目
TEL 011-736-5407　FAX 011-709-4770
http://www.fujijoshi.ac.jp/library/